

# 別れ

## 牧草 泉

男は車窓を眺めていた。風景が次々と流れた。男は東北の鄙びた町に似ていると思った。日本海に面しているからだろうか。列車は小さな駅に止まった。数人の人々が降り、また数人の人々が乗車した。その駅は彼が以前に行ったところがある洪民駅と雰囲気似ていた。男はふらりとホームに降り立った。そして駅前のひなびたホテルに入った。男はレジの女を見てかすかに心が揺れた。女の表情にも動揺が走った。男は女に過去の恋人を思い重ねた。女は男に亡くなった夫の体臭を感じ取っていた。二人は見つめ合った。時間が止まった。男にとつては長い時間に感じられた。女がふと笑顔を見せた。時間はまた動き始めた。

女は二階の部屋に男を案内した。窓の辺りからどしんどしんという音が聞こえた。男は窓を開けて外を見た。薄暗い街灯を背に、一人の少年がボールを壁に投げつけて、一心に戻ってくるボールをグローブで受けていた。男は体を乗り出してそのボールを素手でつかむと、少年に投げ返し

た。少年はボールをグローブで受けると、また力一杯男に向かつて投げた。今度は男がボールを遠くへ投げた。少年は必死でボールを追っていきグローブで受けた。「私の息子なの」振り向くと目の前に女がいた。少年は二人を見るとつと笑った。「あの子には父親がいないの」女がぼつりと言った。

男が風呂から上がっていると、ドアをノックする音が聞こえた。女が敷布を手にして入ってきた。女は、手馴れた手つきで布団を敷くと、立ち上がりながら、言った。「ゆつくり休んでください」二人の目が合った。少し時間が止まった。男は女を引き寄せると、そつと抱いた。女は抗わなかった。男が唇を重ねると、女は男の肩に手を回して男を力いっぱい抱きしめた。「いいの？」男の問いに女は頷いた。男は久しぶりに女の肌に触れて、何度も絶頂に達した。女も湧きあがるような快感に身を任せていた。そうして必死で男の体から夫の体臭を嗅ぎ取るうとした。夫以外の男に抱かれるのは初めてだった。「少年は？」、「金曜は塾の日なの。心配いらぬわ」、「どうして？」、「私つてあの子の心は何でも読めるのよ」、「俺と密会しても？」女はククッと含み笑いすると答えた。「大丈夫よ。見つかってもあの子が私たちを責めることは絶対ないわ。あの子はあなたが気に入ってるのよ」女は、男が眠りについたので確かめると、そつと部屋を出て行った。

翌日、男は部屋に響く振動で目を覚ました。男はすぐに気づいた、少年が投げつけるボールの音であることを。窓を開けると、庭に少年がボールを持って立っていた。男は少年の願いを理解した。階下に降りていくと、駐車場の空き地で少年のキャッチボールの相手をした。少年の眼差しは喜びで生き生きとしていた。女は男の部屋の布団を片付けながら、二人がボールをやり取りするのを、領きながらうれしそうに眺めていた。

その夜、女は臆することなく男の部屋をノックした。男はドアを開けると何も言わずに女を抱き入れた。女は激しく唇を求めた。女はあえぎながら言った。「明日は発つからね」男は頷いた。長くいて欲しかった、いや一緒に暮らしたかった。女は男と少年がキャッチボールにうち興じる光景を思い出していた。男が工事現場をあちこちと渡り歩く流れ者であることは、雰囲気知れた。夫婦生活を経験した女は男のすべてを読み取ることができた。

男はカウンターで宿泊代の清算をした。「ありがとうございました」女が言った。男は頷くと玄関を出た。女は急に小走りで男の後を追った。女は男に追いつくと、男の手を強くつかんで言った。「どうしても行くの？ 私の体では満足できなかったの？」女は自分の体で何度も絶頂を極めて全身を痙攣させる男の姿を思い浮かべた。

二階の部屋から少年が二人の成り行きを見守っていた。

その表情は真剣そのものだった。少年は二人が惹かれあっていることを知っていた。女が男に抱かれたこともうすうす気づいていた。少年が塾から帰ってきたとき、女の体臭に今までとは異なる荒々しい体臭を嗅ぎとっていた。さらに、女がこれまでになく温和な表情で優しく接してくれたからだ。

「あなたの行く道つていつかは途切れるのよ」、「俺の宿命なんだ。これでいいんだ。あんなのことは忘れないよ」と男は言った。「あの子もあなたを待ってるわ」男はびくりと肩を振るわせた。男の足が止まった。振り返ると、怒ったような表情で女を睨み付けた。女は時間に身を任せた。これが最後のカードだった。女は期待した。しかし男は背を向けると、歩き出した。男の姿が次第に小さくなっていく。女はもう止めようとはしなかった。少し背をかがめて歩き去る男の後姿を見つめ続けた。

少年は男が歩き去るのを見ると、ボールを何度も何度も机に抛り続けた。そうして狂ったように涙を流しながら壁に向かつて叫んだ。「お母さん、なぜ、引き止めないんだ。手を握って引き止めればよかったんだ。お母さんも好きなんだろう！ お母さんのバカ！ バカ！ バカ！」ボールは狂ったように部屋を跳ね回った。明日から、女にはいつもの平凡な生活が待ち受けていた。女は泣きながら、夫との生活の思い出をもつと遠くに捨てようと考えていた。